

小学校外国語活動における教材開発の 指導のあり方についての一考察 — 教員養成を行う学科の演習授業を通して —

北村 尚紀

印西市立滝野小学校

本研究では、主に小学校教員を目指している大学生に小学校外国語活動における教材開発をどのように指導する必要があるかを考えた上で授業開発を行い、その成果と課題を考察することを目的とした。現在、文部科学省でも小学校外国語活動を指導できる教員を養成するための効果的なプログラムの開発を行っている。その中でも教材開発は、重要なテーマの一つとなっている。教材開発においては、教科書や副教材を基に児童の実態を把握し、自ら教材を考え、つくっていくことが重要である。本授業では、学生自身の好きなことや特技などを活かして授業を組み立てる経験をすることで、学生の教材開発や授業づくりに対する考え方に変化が見られたことが質問紙調査などから読み取ることができた。

キーワード：小学校外国語活動、教材開発、小学校教員養成、自らがつくる授業、授業観の変化

1. 研究の背景

1.1. 小学校外国語活動をめぐる状況

平成 22 年度より全国の公立小学校で外国語活動の授業が始まった。現在のところ外国語活動は教科ではなく、領域の扱いなので検定教科書は存在せず、平成 22 年度には『英語ノート』が、平成 23 年度からは『Hi, friends!』が配布され、多くの学校でテキストとして使われている。また 2015 年の中央教育審議会・教育課程企画特別部会では、新しい学習指導要領に関する論点整理¹が行われ、その中で小学校の外国語活動については、今までの成果と課題を踏まえて、中学年（小学校 3 年生）から「聞く」「話す」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年（小学校 5 年生）からは発達段階に応じて 4 技能（「聞く」「話す」「読む」「書く」）を総合的・系統的に扱う「教科」として英語を学習することが検討されている。

文部科学省は平成 27 年度英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究を予算化しており、次期学習指導要領の改訂に向けて、小・中・高等学校の教員養成の現

状を調査し、効果的なプログラムを開発する研究を行っている²。その中では、小学校の英語指導法に関する科目のイメージの一つとして教材開発、教科書・教材の効果的な活用に関する研究・語彙・表現の指導が挙げられている。また、平成 28 年 2 月 27 日には、英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業シンポジウムが行われた。その中で教育委員会、大学、英語教育関係者等に協力を仰いで実施した教員養成・採用・研修等の在り方に関する調査研究の結果が報告され、その結果を受けて開発している教員養成・教員研修のコア・カリキュラムが提案された。

1.2. 大学における小学校外国語活動の授業

このような動きがある中、全国の大学では、教員養成系の大学を中心に小学校教員養成課程の中に小学校外国語活動に関する授業を位置付けるようになってきた。例えば東京学芸大学では、「小学校英語教育概論」、「小学校英語教育演習」などの授業が主に 2 年次、3 年次を対象として行われており、そのねらいとしては、小学校で英語を教えるために必要な知識・技能・理論を学ぶものとなっている。ただその授業は、初等教育教員養成課程全員が履修するものではなく、初等教育教員養成課程英語選修の学生の必修科目、また中等教育教員養成課程英語専攻の学生の選択科目となっている。

同じように千葉大学でも、教育学部において「外国語活動 I・II」、「小学校英語演習」、「小学校英語実践」な

Naoki KITAMURA: A Consideration of the Methods of Creating English Teaching Materials for Foreign Language Activities

Takino Elementary School, Inzai City

どの授業が開講されており、主に1年次から3年次の学生が履修できるようになっている。実際に受講する学生は、小学校英語選修の学生が中心で他の選修の学生は少数となっており、履修する学生のほとんどは積極的に授業に参加していると担当の教員は述べている³。

また敬愛大学では、「小学校英語 I・II」、「小学校英語指導法 I・II」などの授業が行われている。敬愛大学は、国際学部こども学科があり、教員養成を行う学科⁴としてこれらの科目は 1・2・3 年次の必修科目となっている。

前節で述べた小学校外国語活動教育の動きを考えると、これからの小学校教員には益々小学校で外国語活動を教えるために必要な知識・技能・理論を学ぶ重要性は高まっていると言えるだろう。

しかし、文部科学省は外国語活動の取り扱いについて、外国語活動指導法を小学校教諭の教職課程において「教職に関する科目」に準ずる科目として「教科又は教職に関する科目」の中に位置付けた上で開設することが望まれる、という通知⁵を公布したが、小学校免許状の認定課程を有する大学を調査した報告⁶では、外国語活動に関する教職課程の開設状況はまだ国立大学で全体の62%にあたる 51 大学、私立大学では全体の 31%にあたる 145 大学である。

1.3. 小学校外国語活動の指導法に関する先行研究

教員養成を行う大学における小学校外国語活動の指導法に関する研究は、まだそれほど多くはない。北條・松崎(2012)は、教員養成系の大学における小学校英語教員養成プログラムの効果について論じている⁷。この中で参加対象者である大学学部生・大学院生は、とくにカンファレンス、つまり全体での協議や授業後の参加者による議論が有効であると回答している。課題としては、授業後の議論をまずグループで行い、その後全体での協議にする方が良いという点を挙げている。

佐藤・執行・カレイラ松崎(2015)は、小学校外国語活動を指導できる教員の育成に向けてシラバスを作成し、学生にアンケートを実施してシラバスの効果について考えた。そのまとめとして、シラバスにアクティビティを作成することを多く盛り込み、学生が主体的に参加できる授業を行うことで、これからの小学校教員に求められる力が身についたといえること、また学生が自信を持って実践できる場を増やすことが大学における小学校教員養成に必要であるということを指摘している⁸。

物井(2011)は、外国語活動を指導できる小学校教員を養成するために大学が提供すべきことは何かを考えるための基礎調査を行い、大学 1 年生が受講する「総合的な学習の時間 (小学校英語入門)」を履修する前後で受講者の知識、および不安感の変化を調査した。その中

で、履修者が履修前に知識が乏しく、且つ不安に感じる授業内容として、授業で小学生が使う教材の上手な作り方という項目が挙げられている⁹。

教員養成を行う大学において、小学校外国語活動における教材開発の指導を、講義中心ではなく、自分たちで授業づくりを行うという演習授業を実施し、その成果と課題を検証するという研究は、ほとんど見当たらない。また本研究では、先行研究での課題となっていた小グループでの授業アイデアの交流を行う。そして、教員が教材開発の例を示した後に、学生自らが教材開発のアイデアを実際に考える。これらの開発授業を検証して小学校外国語活動の教材開発の指導のあり方を考えたい。

1.4. 小学校外国語活動に関する授業シラバス

本節では、筆者が授業を行った敬愛大学のシラバスについて見ていく。

2015 年度敬愛大学の小学校外国語活動の授業シラバス¹⁰を確認すると、まず「小学校英語 I」では、子どもの発達、特に言語発達を理解し、小学校英語の基本的な知識や理論、指導方法を学び、小学校英語教育についての在り方を考えることをねらいとしている。授業内容としては、英語の歌、チャンツ、ゲーム、絵本の利用の仕方や教室で使える英語表現、文部科学省作成の副教材である『Hi, friends!』について学び、実際に活動を体験することがメインとなっている。

次に「小学校英語 II」では、小学校外国語活動を担当する教師として適切な技能を、実践を通して理解を深めていくことを主なねらいとしている。授業内容としては、アクティビティとその裏にある理論についての理解を深め、グループワークをしながら、一つのアクティビティをレッスンプランへとつなげていく形で進められる。

そして「小学校英語指導法」の授業では、レッスンプランの作成、模擬授業の実践を通して小学校教員として適切な指導技能の習得、教材研究、授業の進め方について理解を深めていくことをねらいとしている。授業内容としては、小学校外国語活動の現状と課題、コミュニケーション・アプローチ、内容中心アプローチなどの外国語教授法、教材開発の仕方や ICT の活用、評価について、レッスンプラン作成と模擬授業などとなっている。

以上のように、敬愛大学ではこれからの小学校教諭に求められている英語教育に関する指導技能や理論の習得が、講義だけでなくグループワーク形式での体験型による学習で行われている。全員の必修科目であることも含めて、かなり理想の形になっていると考えられる。

1.5. 小学校外国語活動における教材開発指導の可能性

しかし、ここで小学校教育現場に籍をおく筆者にとって一つの疑問が生じる。果たして小学校教員養成段階でのこれからの小学校外国語活動における教材開発指導はこのような内容だけで十分なのだろうか。

この場合の教材開発とは、全く新しい単元をつくるということだけではない。既存の教材を学習した後に、その発展的な内容として児童の実態に合わせて開発するものも含まれる。

外国語活動以外の教科を考えると、自ら教材開発を行い、授業をつくっていくことがよく見られる。例えば、旅行が好きな教員が旅をした地で教材を見つけ、それを使って社会や国語の授業を行う、あるいはテレビで見た映像を利用して教材をつくり、いじめについて考える道徳の授業を行う。

しかし、現在の小学校現場では、外国語活動の教材開発については、十分に行われているとは言いがたい状況がある。外国語活動の授業は、業者に委託している自治体も多くあり、そうした地域の学校では、教員自らが教材開発をすることはごく稀であると考えられる。

そうした個人の発想に依拠したり、斬新な発想を活かしたりした授業づくりというものは、外国語活動の授業においてもあり得るだろうし、そうした発想を教員養成段階において学生に伝えることには意義があるのではないか。もちろん、副教材『Hi, friends!』を使った指導法などを基礎として抑えておくべき事項は必要であるが、発展的な内容として、外国語活動においても自らがつくる授業を紹介し、授業づくりをしてもよいのではないだろうか。果たして、それはどのように教えたら良いのだろうか。

2. 研究の目的

本研究は、教員養成を行う学科のある大学において小学校外国語活動の教材研究・教材開発の指導のあり方を考えた演習授業プランを作成、実践することでその成果と課題を考察し、小学校で外国語活動を指導できる教員を養成する上での授業づくりについて考えることを目的とする。

3. 授業の開発

3.1. 授業開発の視点

現在の教員養成系の大学における小学校外国語活動に関する授業シラバスは、外国語活動の現状や指導理論、指導技術を学んだ上で、文部科学省作成の副教材『Hi, friends!』を紹介し、模擬授業やレッスンプランを作成するという内容に重きをおいていると考える。そこで、本授業では、授業開発の視点として、上記の学習を基礎

として自らが教材を考え、つくっていく教材開発の可能性について伝える内容にしていきたいと考えた。その際の指導のあり方として、まずは筆者自らが考えた教材を紹介し、自分の好きなことや得意なことが教材開発につながることを伝えることにした。筆者は、自ら教材をつくり、実践していくという目的を持って、「英語の歌プロジェクト (E うたプロジェクト)」を2010年に立ち上げ、現在も活動している。このプロジェクトは文部科学省作成の副教材『Hi, friends!』には2曲しか出てこない英語の歌を、自分たちの手で作曲、教材化し、実践をしているプロジェクトである¹⁾。この取り組みが今回の授業を開発するにあたって、一つの事例として合うのではないかと考えた。ただし授業内容としては、英語の歌を教材化するの是一個の事例であり、筆者らが得意としたことがたまたま英語の歌だったということを伝え、学生たち自身の興味・関心のあることや特技を活かした教材開発について考える構成にする必要があった。

3.2. 授業の構成

今回は、大学2年生を対象とした2コマ(90分×2回)の授業を構成した。少人数で行う方がより効果的なものになると考え、敬愛大学における「2年次専門研究」というゼミ形式の授業での実施とした。2年次専門研究は、担当教員の専門性を活かしたカリキュラムが組まれている。今回授業を実施したクラスは、阿部専任講師による授業であり、教育方法をテーマとし、多種多様な授業・教材のあり方について学ぶことをテーマとしている。筆者は、小学校外国語活動において教材開発を行っている実践者として、2コマの授業のゲスト講師という形で授業に加わった。

4. 授業の展開と考察

4.1. 本授業の展開

実施校	: 敬愛大学 (千葉県千葉市)
授業名	: 2年次専門研究 (担当教員: 阿部学)
実施方法	: 筆者と阿部のティーム・ティーチング
時間	: 90分×2コマ
実施日	: ①平成27年10月26日(月) ②平成27年11月9日(月)
参加人数	: ①、②ともに11名
授業展開	

<1コマ目>

①-1 前時の振り返り

前回の授業で行われた内容を学生がA4用紙で1枚程度にまとめ、報告した。

①-2 事前アンケート

主に学生の外国語活動学習歴、外国語活動に対する教

材観を知るためのアンケートを行った。

①-3 グループ活動（ウォームアップ）

“How many jobs can you write in English?”

3~4 人のグループごとに、英語で何個の職業名が言えるかを競うゲームを行った。後の活動にもつながるウォームアップゲームである。3 分間で 15 個程度から多く言えたグループは 29 個言うことができた。誤答例としては、baker を bakery、police officer を police などがあつた。中には astronaut、pharmacist などの比較的難しいものも出てきた。

①-4 自己紹介（北村、阿部、学生の順に英語で）

英文 3 文程度で自己紹介をした。最初に授業者がモデルを示すこと、ウォームアップ活動ですでに英語モードになっていることから比較的スムーズに進めることができた。

①-5 E うたプロジェクトについて

最初に“Go Straight!（道案内の歌）”を阿部がギター、北村がボーカルで演奏した。この歌は、E うたプロジェクトで作成した最初の楽曲であり、『Hi, friends!2』の Lesson4「道案内をしよう」に合わせた形で作成した。道案内に関連した表現が入っていて、外国語活動の授業で使える既存の英語の歌は、なかなか存在せず、それなら自分たちで作ってみよう、という発想で作成した歌である。その後、E うたプロジェクトの活動について説明した。主に今までに作った曲の紹介をその歌が作られるまでの経緯、工夫したことなどを中心に話した。学生たちは熱心に聴いていた。

①-6 “What Do You Want to Be?（将来の夢の歌）”

今まで作成した楽曲の一つである“What Do You Want to Be?（将来の夢の歌）”の小学校での授業の進め方を実際に学生たちに体験してもらった。

はじめに、小学生の頃なりたかった職業あるいはもう一度小学生に戻ったとしたらなりたい職業を考えさせた。小学生に対して授業をするときには、将来なりたい職業を考えてもらうのだが、本授業の学生たちは全員「教師」だったのでこのような設定にした。

次に、歌詞の音読、歌の練習を行った。歌の練習の際には、Sing after me すなわちフレーズあるいは文ごとに授業者の後に繰り返して歌うという活動を行った。この活動を行うと普通に練習するより短時間で歌の習得ができる。本授業でもほとんどの学生が 5 分ほどの練習後には、ある程度歌えるようになった。

その次に、歌の録音、台詞の録音を行った。マイクと Apple 社製のコンピュータを使った簡単な録音機材で行った。台詞の録音というのは、最初に考えた職業名を使って“I want to be ~.”という台詞を一人一人録音することである。学生たちのほとんどは、録音は初めてであったた

め多少緊張はしていたが、授業者側がサポートしながら笑顔や笑いが出る活動となった。

①-7 振り返りシート

今日の授業を終えての感想等を書いた。E うたプロジェクトの活動に興味を持ってくれた学生、E うたプロジェクトで作成した楽曲を使うと児童が興味を持って外国語活動に取り組むだろうという意見、録音することが緊張したということなどが書かれていた。

<2 コマ目>

②-1 前回の内容をまとめたレポート発表

①の授業の振り返りを担当する学生が行った。歌を通じてたくさんの単語やフレーズそして英文が学べること、子どもたちも興味を持って英語学習に取り組めるので、自分が教師になったら授業で使いたいということ、初めて歌の録音ができたので嬉しかったこと、などの報告があつた。

②-2 録音した曲を聴き、曲作りのポイントを考える

①の授業で録音した“What Do You Want to Be?”を流したあと、ディスカッションしながら曲作りの際の大切なことは何かを確認した。学生からは歌いやすく楽しい曲、その時間にあつた曲を作ることなどの意見が出たが、授業者からの問いかけでキーフレーズやキーセンテンスが何度も繰り返し出てくるようにすることという意見も出た。授業者からは、小学生の音域を考えて作曲したこと、英語学習に利用するので英語のリズムをできるだけ崩さないことなどを指摘した。

②-3 自分の好きなことを活かした外国語活動の授業次のような投げかけをした。

「自分たちは、音楽が好きで曲作りができる。だからそれを教材にして外国語活動の授業を組み立ててみた。じゃあ、みんなの好きなことや特技、今関心のあることを活かした教材を作るとしたらどんなことが考えられるだろう?」

学生には、まず一人で考える時間を 3 分ほど与え、その後ペアでそれぞれの考えたことをシェアして意見をもらう時間を約 10 分とり、さらに一人で自分の考えをまとめる時間を 8 分ほど与えた。

その結果、例えば以下のようなアイデアが出てきた。以下に授業者である北村、阿部のコメントと共に記述する。なお、北村、阿部のコメントは授業内で行われたものであり、学生がそれぞれのアイデアを述べた後、その評価の一つとして述べたものである。学生たちはそのコメントを聞いてうなずいたり、メモをとったりしていた。

学生 A：私は工作が好きなので、子どもに画用紙を渡して、自分で使いたい色を英語で言って、クレヨンをもらう（という活動をさせる）。子どもは何色も使いたければ、英語でいろいろな色を言うことになる。さらに紙を

切るときにも cut, cut とか言いながら切る。その紙をつなぎ合わせて、好きな形を作って、その形が例えば象に見えるのだったら、象って英語で何というのかを自分で発想するなどその形に合う英語を調べる。それを受けて、教師がコメントしてさらにアイデアを深められるよう支援する。

北村：それはおもしろそう。英語の授業のネタとして、折り紙を使ったものもある。小学校だけでなく、中学校の英語の教科書でも使われていたことがある。例えば「折る」という言い方は fold と言うが、あまり中学でも重要単語としては扱われていない。だけど日常では使いそうな単語だ。あとは例えばそのできた形、つまり作品にタイトルを英語でつけてみる。子どもは自分が言いたいことややりたいことだと学ぶ意欲はすごく高い。自分で作った作品だから名前を英語でつけたい。その英語は自分で調べたり覚えたりする。

学生 B：私は漫画を読むのが好きなので、英語で4コマ漫画を作るという授業を考えた。中には絵が苦手だったり、ストーリーを作るのが苦手だったりする子もいると思うので4人で1グループになって作る。台詞や効果音なども英語にする。

阿部：効果音の英語というのはおもしろそう。ただ一から英語で書こうとすると言語によりすぎるので、たぶんパズルっぽくやるといいと思う。英語の漫画がネタとしてすごくたくさん置いてあって、これ使えるというのは使うという感じ。ネタから合わせていって作るとハードルが低くなるのでは。

北村：ヒントがあることは重要。とてもおもしろいアイデアだけど、実際その活動をやるとしたら結構レベルが高い。擬音とか難しいのでなかなか書けないし、調べるのも簡単ではない。書きたいことはあるのだけど、という子どもにどういうヒントを与えてあげるかで子どものモチベーションが変わってくる。

学生 C：私は野球が好きで、今の時期だとプレミア 12¹²をやっているの、野球が好きで子がクラスにいたら、どこの国が出ているのかとか、知っている野球用語を出してもらってそれをもとに授業をする。実は日本の野球用語とは違う言い方をするものもあるのでそれも伝える。その後、小学校の体育の授業でティーボール¹³をやるときに英語を使ってやってみる。

北村：さっきからすごいと思うのは、英語だけでなく図工や体育など他の教科と組み合わせる形でやってみようという発想だ。教科横断的な授業になる。英語の教授法でいうと content-based instruction (内容中心教授法) に近い考え方になる。私も野球が大好きなのでそういうテーマの授業を作りたい。

学生 D：私は家庭科のお菓子づくりをテーマにする。まず海外の料理番組を使って料理をするときに使う英語を学ぶ。その後2組のグループを作り、片方は料理のレシピを持って、日本語は使わずに英語やジェスチャーで伝え、もう片方はそれを頑張って理解して料理を作る。最後に2組で作った料理を試食する。おいしくなくても食べる(笑)。

北村：おもしろい。英語授業でよく出てくるインフォメーション・ギャップを利用した活動の発展になるね。インフォメーション・ギャップというのは、例えばAとBの2チームがあって、Aの答えをBの人は知っていて、Bの答えをAの人は知っている。そこでお互いに尋ね合うという活動です。Dさんのアイデアでは、料理を作って試食するので、きっと話す方は必死で伝えようとするだろうし、聞く方も必死で聞き取ろう、理解しようとするだろう。モチベーションが上がる活動だ。

学生 E：バスケットボールを題材にして、対象としては小学校6年生くらいで。バスケットボールは元々アメリカで発祥したスポーツで、パスとかバスケットをやったことない人にはわからないようなペネトレイト(相手の陣地に切り込んでいく)などという単語も紹介する。最後は簡単な単語を使って英語でコミュニケーションしながら試合をする。

北村：それも体育との横断的授業になりそうだ。今の話でいうと私はペネトレイトという単語を初めて聞いたのだが、例えばその単語はバスケットボールの時だけでなく、他にもこういう意味がある¹⁴などと+αの知識を入れるのも良いと思う。バスケットボールに興味がある子は、この授業はのってくるかもしれない。でも興味がない子でもその+αの部分にひっかかってその授業がおもしろく感じる場合がある。そういうことを意識した授業づくりは大切だ。

学生 F：自分の好きな台詞を英語で言うという授業。例えば、ドラえものの好きな台詞を一言決めてそれを英語に直して覚えるという感じ。小学生にとっては少し難しいかもしれないけど、こういう時はこう言うのだという発見がある授業になると思う。

北村：それは、決して難しい内容ではないと思う。まず、一言に限定していること、そして自分の好きなキャラクターの好きな台詞を英語に直すということがポイントだ。好きなキャラクターのお気に入りの台詞なら、少々難しくても子どもたちは頑張る。それにキャラクターに合わせた声、例えばドラえものの声の感じで“I am Doraemon.”と言う子が出てきたらおもしろい。ただ、もちろんそのヒントや支援となる教材や人は必要だ。

学生 G：小学校 5、6 年生向けの授業として英語によるインタビュー活動をする授業をやってみよう。まず、海外で活躍するスポーツ選手が英語でインタビューされ、英語で答えている映像を見せる。その聞き取りを教師が解説しながら学習をする。まとめとして簡単な英語でインタビュー活動をする。オリンピックも近いので頑張るのではないかな。それを動画に撮り、ニュース映像のように流すのも良いと思う。

学生 H：私は D さんの授業に似ている。英語を使って料理をするのだが、作る料理をハンバーガーなどその国の特徴的な食べ物にして、最終的には作った料理でレストランごっこをする。メニューも英語で作り、食べる時には、食事のマナーについても教えたい。

北村：それなら D さんと一緒に教材研究をして、授業づくりをしてみると良い。そのことが好きな人同士で集まると、足りないことが補い合えるし、さらに良いプランができるかもしれない。逆にそのことに全く興味のない人がグループにいてくれると全く違う視点でその授業を見てくれるのでこれも良いと思う。興味のない人がメンバーに入ってそのメンバーがおもしろいと思える授業ができれば、より多くの子どもが興味を持ち、学びのある授業になっていく可能性がある。

②-4 振り返りシート

2 コマ目の授業を終えての振り返り活動を行った。今まで学習指導要領に則った授業、あるいは副教材『Hi, friends!』を土台とした授業づくりしかないと思っていたので、びっくりしたし楽しかったなどの記述が見られた。

②-5 事後アンケート

2 コマの授業を終えてのアンケートを実施した。事前アンケートと合わせての結果については 4.3. で述べる。

4.2. 授業の考察

授業全体を通して言えることとして、参加した学生たちのほとんどは教員を第一志望、または悩みながらも教員となることを卒業後の進路選択の一つに入れているメンバーであったため、意欲的に取り組む学生が多かった。

1 コマ目に関しては、E うたプロジェクトで作った歌を紹介し、みんなで練習し、録音体験をしたことで、学生どうし、そして学生と授業者とも心理的な距離が近づいたようだ。また、一人一人が台詞を言うという適度な緊張感も学生にとっては刺激的だったようだ。

2 コマ目の授業では、授業者たちが開発した英語の歌の教材作成のポイントを押さえた後に、自分の好きなこ

とや特技などを活かした外国語活動の教材開発を学生たちが体験した。自らが教材をつくるということで、もう少し学生たちに戸惑いが見られると想定していたが、予想よりも意欲的にそしてスムーズに進んでいった。個人で少し考えた後、小グループで考える時間をとったのも効果的だったのではないだろうか。授業後に、一人きりでなく何人かで考えられたので良かったという学生をつぶやきが聞こえた。また、同じ「料理」をテーマにして授業をつくりたいと考えた学生どうしが授業後の教室外の廊下でもその話題で盛り上がっている姿も見かけた。与えられた教材（例えば外国語活動でいえば『Hi, friends!』など）だけに頼らず、その教材の重要性を認識した上で、自ら教材をつくることの楽しさ、そして難しさを外国語活動においても感じてもらうことがこの授業一つの目的であると言えよう。

4.3. 事前・事後アンケートの結果と考察

(1) アンケートの結果

本授業の 1 コマ目の最初と 2 コマ目の最後にアンケートを実施した。事前アンケートの回収数は 10 名、事後アンケートは 11 名であった。

アンケートの中で、本研究に関連した結果は以下のようであった。なお、記述式以外の項目は 4 件法で実施した。また、本節における波線部は筆者によるものである。

Q3-1 今回の授業を受けて、あなたの外国語活動の授業に対する考え方（授業観）に変化はありましたか。

大きな変化があった 3 名

変化があった 8 名

あまり変わらなかった、変わらなかった ともに 0 名

Q3-2 くわしく教えてください。

・今までは英語の授業を考えるという事はなかったが、自分の好きなものを授業にしていけることができたなら楽しいだろうなと思った。

・自分の好きなもの・ことから英語や外国とのつながりを考えながら授業案を作ることが、楽しかったり難しかったりして、自分の視野を広げることができた。

・思ったより授業って自由でいいのだと分かった。他の授業に生かしていける英語の授業が作れると学んだ。

・英語が元々嫌いな方だったので、授業をつくると言われてもピンとこなかったが、授業を受けて英語に対する嫌悪感が少し薄れたように思えた。

・ただ教科書の内容だけでなく、自分が興味あるものを教えることができれば、自然に伝えられるのではないかなと思った。

・今までは、Hi, friends!を使った授業のイメージが強かったが、今回の授業を通して教材は自分で作れるとい

うことがわかった。

・授業づくりをしていく中で、指導要領や教科書から考えるのではなく、おもしろいアイデアから作るという考えが斬新だった。

・いつもは学習指導要領を見て授業を考えていたが、自分が興味のあること、好きなことを中心に授業を考えると、いろいろなアイデアが浮かび、とても楽しかった。

Q4-1 あなたは小学校の教師になりたいと考えていますか。

<事前アンケート>→<事後アンケート>

考えている 4名→変化なし

考えているが悩んでいる 4名→5名

選択肢の一つである 2名→1名

考えていない 0名→変化なし

Q4-2 2回の授業を終えて、その気持ちに何か変化はありましたか。

この設問に関しては、Q4-1の設問にどう答えた学生かで分類した。

(a) 考えていると答えた学生

・教師の楽しさや違う一面を知り、さらになりたいと思った。

・小学校教師になりたい気持ちが一層強くなりました。英語が3・4年生から始まるということで英語の授業というのは楽しくやらなければならないと考えている。

・英語を教えることが少し不安だったが、英語の歌をつくったり、自分の好きなことから教材を考えたりできるということを学び、身近なことを英語と関連させて授業づくりができたと思った。英語の授業づくりが楽しみになった。

・もっと自分が英語を好きになって、その気持ちが子どもたちにも伝わるような授業づくりをしていきたいと思った。

(b) 考えているが悩んでいると答えた学生

・自分が思いついた授業や、ゼミにみんなの思いついた授業を実際に授業してみたなら楽しそうだなと思い、教員になって実践してみたいと思った。

・英語の部分では心配はなくなった。他の面で悩み、心配がまだある。

・英語が苦手な嫌だったが、それでも教えることはできると分かった。少し頑張りたいと思う。

・自分も何かおもしろい教材を作ってみたいと思った。子どもが勉強していることを忘れられるような、楽しみながら学ぶことができるものをつくってみたい。

(c) 選択肢の一つであると答えた学生

・あまり変わらなかった。改めて教員になる難しさを知った。

・私は中学校英語教師を目指しているので、授業を文法や読解中心にならないようにするための教材を見つけることができた。

Q5 あなたは今、小学校で行う英語の授業は、どんな教材を使うと良いと考えていますか。(複数回答あり)

<事前アンケート>

・ゲーム 9名

・英語の歌 6名

・英語の絵本や本 5名

・子どもにとって身近なもの 2名

・ダンス、ALTの先生 それぞれ1名

<事後アンケート>

・英語の歌・音楽 6名

・手や体を動かしながらできるもの 5名

・子どもが好きなこと(体育・家庭科・図工など) 4名

・ゲーム性のあるもの 2名

・実物、実際にあるもの 2名

Q6 あなたが、自分の興味・関心や特技を生かして英語の授業づくりを行うとしたら、どんな授業ができそうですか。出来るだけ具体的に書いてみましょう。(複数回答あり)

<事前アンケート>

・記入なし、わからない 5名

・英語の歌(リズムに合わせて、体を使って、ピアノなど楽器を弾いて) 4名

・ゲーム(外で、ビンゴゲーム) 2名

<事後アンケート>

・記入なし 2名

・体育・スポーツ 5名

・家庭科・料理 3名

・漫画・アニメ 2名

・趣味 2名

・図工・工作 1名

Q7 自由記述(事後アンケートのみ実施)

・授業を受けてみて、Eうたプロジェクトや自分のオリジナルの英語授業を作るなど、一番大切なことのようにのに、やったことがなかった。

・私の英語の苦手意識が少し取り払われた気がした。「英語」という1つの枠にはまらずに、他の教科とリンクさせたり、日常とつなげたりして、楽しい授業ができると知って、おもしろいな、と感じた。他の授業でも枠にはまらず、柔らかい頭で授業づくりを考えていきたいと思った。

・英語だけとして見ないで、英語をひとつのツールとして考えられるようになったら、いろいろな授業で英語が出てきて楽しいと思う。

・学ぶことが多い授業だった。

・自分も教材を考えて、自分だけの教材を作りたい

と思った。

・歌を作ると聞いた時、高度な知識や技術が必要なのかと思ったが、一人一人の得意なことを合わせて作っていることを知り、いいものを作るのに必要なのは技術ではないと思った。

・初めて学ぶこと、知ることばかりでとても勉強になった。自分の授業にも活かしたいと思った。

(2) アンケートの考察

Q3-1の授業観の変化について尋ねた質問では、全員が何かしらの変化があったと答えている。ただ、肯定的に捉えることもできるが、やはり今回の授業だけでは授業観を大きく変えるところまでは、行き着かなかったとも言える。

Q3-2の授業観の変化を詳しく記述する質問では、波線部などの記述から変化がより具体的に読み取れる。特に英語に対して苦手意識のある学生に変化が見られた。今後の課題としては、英語だけでなく他の教科でもこの意識を広げていくことが挙げられる。

Q4-1とQ4-2では、小学校教師という職業を選択肢の一つと捉えていた1名の学生が、なりたいと考えているが悩んでいるに変わった。この学生は、結果の波線部に書かれている通り、英語に苦手意識があったが自分の興味のあることで授業づくりをするという経験が変化のきっかけとなったようだ。

Q5については、事前の調査に比べ事後調査において教材観の広がりが見て取れる。特に英語を他の教科の中で関連させてみると良いと考えた学生が増えている。児童の実態に合わせて、このような取り組みをしていくことは、これからの授業づくりにおいて大切なことである。結果にまとめた以外にも、それぞれ1名ずつではあるが、写真や映像、子どもにとって身近なもの、想像しやすいもの、英語につながるものすべてなど様々な意見が出ていたのも興味深い。

Q6については、事前アンケートでは、この設問に記入しなかった学生がわからないと書いたものも含めて5名いたが、事後アンケートでは2名となり、さらに記述量が増え、内容もかなり具体的なものとなった。

そのいくつかを下記に紹介する。

・スポーツ選手の英語ニュースでのインタビューを見て何を話しているか理解する。オリンピックが近いので、子供たちもオリンピック選手になったつもりで英語インタビューをしてみても動画を撮る。ニュース映像のように編集する。

・英語を使って料理をして(児童は真似る)、ハンバーガーを作る。その後レストランごっこをする(英語のメニュー、ウェイトレス、食べる際のマナーなど英語だけでなく、外国の料理や文化に触れる)。

・お菓子づくりをする。海外のクッキング番組を見て、

料理用語を学んで班に分かれてチーム戦。班の中で英語を使って「レシピ説明チーム」と「作るチーム」に分かれて料理開始。最終的にうまくできたチームが勝ち。

・好きな漫画の台詞を英語で言う、4コマ漫画を作って、効果音や台詞を英語で言う。

・工作をする(色や道具、動作を英語で言ってみる。作品のタイトルを英語でつける)。

・猫などの動物の鳴き声を調べる(様々な国との鳴き声表現の違いを知る)。

授業中にも、口頭で発表してもらったが、それを整理してこの設問にまとめている学生が多い。

Q7の自由記述については、波線部のように学生たちは、それぞれにさまざまな学びがあり、その学びを自分たちの言葉でしっかりと記述していることがわかる。教科書や副教材だけに頼らず、自分達でも教材はつくることができると感じ、つくりたいという意欲が出てきた学生も複数出てきている。

5. 総合的考察

最後に、本研究において得られた成果と課題について本章でまとめておくことにする。

まず、本研究の成果としては大きく2つのことが挙げられる。

①小学校外国語活動における教材開発の可能性を伝えることの必要性

他の教科と同じように、小学校外国語活動の授業においても自ら教材を開発できる可能性があることを伝える授業を行うことは、学生にとって新たな視点を与えるものとなり得る。どうしても教材(外国語活動の場合は副教材である『Hi, friends!』)があると、それを使ってどう教えるかに視点が行きがちである。もちろんそれは重要であることに異論はないが、学生たちに児童の実態を把握し、その教材を土台として発展的な内容として自らが教材を開発できるのだと伝える授業は、他の教科と同様に外国語活動にもなくてはならないと考える。

②外国語活動に対して苦手意識を持つ学生の変化

事前アンケートで英語が嫌い、あるいはどちらかといえば嫌いだと答えた学生に、今回開発した授業を行ったところ、授業の実施中の様子や、授業後におこなった質問紙調査においてとくに顕著な変化が見られた。自分の興味や関心のあること、好きなことを授業づくりに役立てられる可能性があると思った学生たちは、外国語活動を教えることに対するハードルが下がってきたのではないかと。

本研究の課題としては、開発した授業では、時数の関係もあり、学生がアイデアをまとめたところで終わっている。今後はそのアイデアを形にして、指導案にまとめ

るところまでもっていければと考える。少人数のゼミであることを活かして、個別指導や自主学习でも対応できると考える。

これから小学校教員を目指す学生は、2020年度からの高学年の英語教科化、中学年から外国語活動の実施が検討されている今、外国語活動に関する知識・技能はもちろん、その教材開発まで考える授業を履修することは、益々重要になっていると言える。

また、現在の小学校現場の実態を見ると、まだまだ外国語活動を指導することに苦手意識があり、積極的に教材研究・教材開発を行っていない教員は多いと思われる。したがって本授業は、小学校教員養成の枠組みだけでなく、小学校現職教員の研修の場でも一定の成果のあるものになり得ると考える。小学校外国語活動はまだ正式に実施されてから日が浅く、経験年数が多い教員だからといって、決して多くの外国語活動に関する教材研究・教材開発をしているとは限らない。ただ、今回はその検証は行っていないので、これからの課題となる。

以上のことから、本研究は課題があるものの、小学校外国語活動の教材研究・教材開発の指導に対して一つの示唆を与えられたのではないだろうか。

<https://ken.u-keiai.ac.jp/up/faces/up/km/Kms00801A.jsp>
(2016年3月24日最終閲覧)

11 詳しい実践内容については、山本長紀・北村尚紀・飯島淳・阿部学・長嶋昌子(2015)「小学校外国語活動における歌作成プロジェクトの実践」木更津高等専門学校研究紀要を参照。

12 プレミア12とは正式名称をWBSCプレミア12(英語名:WBSC Premier12)といい、世界野球・ソフトボール連盟(WBSC)が選出した12カ国・地域参加により、4年に1度開催される野球の代表戦による国際大会である。

13 ティーボールは、野球によく似たゲームで、野球と違うところは、投手が投げたボールを打つのではなく、バッティングティと呼ばれる細長い台の上に置いたボールを打つスポーツである。野球やソフトボールの入門者に合うスポーツで、小学校の体育の授業でも行われている。

14 ペネトレイトは、penetrateという英単語で「貫通する・入り込む」などの意味がある。ニュースなどにも時々出てくる「(ネットワークシステムに)侵入する」という意味でも使われる。

1 文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会の論点整理

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364306.htm 参照(2016年3月19日最終閲覧)

2 文部科学省中央教育審議会教育課程部会 外国語ワーキンググループ(第1回)配付資料

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryu/_icsFiles/afiedfile/2015/11/09/1363330_5_1.pdf 参照

3 2016年度からは小学校課程全体の学生に対して小学校外国語活動の授業履修を必修とする予定であり、学生の様子も変化するのではないかと担当教員はコメントしていた。

4 ただし、教員免許取得が必須ではない。

5 文部科学省(2009)「小学校教諭の教職課程等における外国語活動の取り扱いについて(通知)」2011年9月25日、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/101/shiryu/attach/1340229.htm (2016年3月19日最終閲覧)

6 本田勝久・粕谷恭子・建内高昭・松宮奈賀子(2011)「小学校外国語活動を指導できる教員の養成—質的水準を目指して—」大学英語教育学会『第50回記念国際大会論集』37-42。

7 北條礼子・松崎邦守(2012)「ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの効果」上越教育大学研究紀要、第31巻、pp.237-244

8 佐藤佳子・執行智子・カレイラ松崎順子(2015)「小学校外国語活動を指導できる教員の育成に向けたシラバス作成」敬愛大学総合地域研究、第5号、pp.62

9 物井尚子(2011)「『外国語活動』授業力を備えた教員養成のためのシラバスに関する一考察」千葉大学教育学部研究紀要、第59巻、pp.24-25

10 下記のURLを参照。ただし、一定時間を経過すると自動的にログアウトし閲覧できなくなるため、ここではログイン画面からゲストユーザーとしてログインし、「シラバス検索」から科目名称に「小学校英語」と入力して検索することで各授業のシラバスを閲覧することができる。